

「シエイクスピア劇のセリふ」を読む

へはじめに

この文音すは「セリふの美学・力学」の(一)として
季刊「藝術」昭和五十二年秋季号に載ったものであり、
他に(二)として「日本語はなぜ聴き取りにくいのか」があり、
この二つは同誌昭和五十三年夏季号に載っている。
「シエイクスピア劇の翻訳に重点を置いてゐるの、同時にセリふを
めぐる劇評に充てゐる。しかし正確に言へば、劇評といふ
形を借りての演技論である。」(セリふと動きとあそび)
「讀ま會」では平成十八年五月に「マクベス論」同八月に
「醒めて踊れ」を採り上げた。この「シエイクスピア劇のセリふ」に
おいては「翻訳例として「マクベス」が論じられてをり、さらに
副題として「言葉は行動する」となつてゐる。恒存の
言ふ「役者修行は人間修行」について、今回はより理解を
深めたいと思ふ。

へ各章の要点

一、

昭和二十九年ロンドン・オールド・ヴィクの「シエイクスピア劇を
観、そのセリふの喋り方に魅力を感じ、これは私にも
訳せると思った。

現代日本の新劇にシエイクスピアを取り入れることが出来るし
またさうしなければならぬと思った。

恒存が翻訳において狙つたのは

セリふに潜む強さ、激しさ、跳躍力、そこから出て来る
音聲と意味のリズムである。

ハムレットは、今、この時、なぜ、かういふ言葉で、かういふ事を
言ふのか

一つの行動か、他の行動を生む様に、言葉が言葉を
生み喚び起す様に、その突然性が目に見えてる様に、耳に
聞こえてくるければなるまい。

日本語は膠着語であり、語尾の屈折によつて断定と責任を
先に延し、暗昧に回避することの可能

微妙さの動き、詠歎の表現 ↓ 得手

言葉が言葉を生み出す

言葉によつてある結末に迫られてゆく行動のリズムを作り出す
↓ 不得手

言葉によつて断定することとは、一つの行動である。

行動すれば間違ひを犯す、間違へば責任を取らねばならぬ
それを戒めざる言に、言葉に行動性を持たせぬ様にしてゐるだけ
の事なら、

そこにほいる情緒、詠歎は、いづれも借りゝ感傷に過ぎぬ。

二、

恒存がシェイクスピア 翻訳下狙ったのは

宥そべつてゐる様な現代日本語を起上らせ

シェイクスピアの躍動的なセリふゝ力を活かすこと

例として

マクベス夫人の独白を小田島氏訳・逍遙訳について
批評する。さうに恒存訳を示し、役者諸君は、
この三例のうちのとせりふを喋りたいと思ふかと問ふ。

・小田島氏の「シイラ」の劇翻訳における動機をいしその基本的態度について批評。氏の「シイラ」を「観」か「事」に反してみると指摘する。

・恒なる「せりふ」観とは、

芝居の「せりふ」は、語られてゐる言葉の意味の伝達を目的とするものではない

一定の状況の下で、それを支配し、それに支配されてゐる人物の意志や心の動きを、表情や仕草と同じく形のある物として表出する事。それが目的であり、意味の伝達はそのための手段に過ぎぬ。……

したがって語彙や言廻しの平易といふ事は、ほとんど問題とすに足りぬ

心の動きを声の形に出すこと、何より大事

四

・聖書の口語訳は、戦後の思案のひとつだ

西部劇の日本語吹替目において、聖書からの引用はすべて文語訳の用ゐられてゐるといふ事実をいかに考へるべきか、平易な意味伝達のみ重視する思案を知ることが、

・芝居の「せりふ」は意味伝達を第一目的に考へるべきではないにしても、だからといって、言葉などという面白い間違つた言葉遣ひをしても一向構はぬといふ事にはちがぬ

← 翻訳は日本語の問題であり、翻訳者は言葉を正しく自由に操れる日本語の専門家の方かいい様に思ふ

シェイクスピア劇のすぐれた作品中の主人公達は、
自分の想念に、そこからほいた言葉や行動に裏切られる
ことにより、彼ら自身の存在を揺るがすものにし、
また深化させ、無限に完成に近づくのである。
オセロ・リアーハットは、最後の死か、彼等の錯誤、蹉跎、
破綻のすべてのマイナスを、一挙にプラスに転じる。
マウスでさへ、死により、痛める自分を看護してまた心身の
癒えから漸く救はれるのだ。

←
シェイクスピアのセリふは、最も行動的、行動的なものだ。

何を言っているのかはよく、その時、それを言ふか
それか、見せる様子を言廻ししかしてゐる。

←
日本語のセリふで、その効果を出すために
フレイジングこそが、重要な役割を持つ
フレイジングを、常に意識してゐるためだ。

六、

英文和訳された悪文の例示

戯曲・小説・論文の翻訳には、文脈をたどりにくく、
文意を、理解しにくい、悪文が多く、現代の日本人が
精神衛生上、かかるの被害を受けかねる事実は、
無視し得まい。

ことにシェイクスピアにおいては、致命的だ、立体的な
三次元の世界が、平面図と化してしまふから、
セリふのフレイジングは、文の構成を立体的につかむ、とか
下書き、遠近法の技術なのだ。

・ シェイクスピアの戯曲は

ブラウニング・ヴァース（無韻の律文）で書かれてゐる。

各行十音節・弱強五歩格の原則が守られてゐる。

作品の行数と散文の割合について説明。

七

・ 一行の弱強五歩格・十音節というブラウニング・ヴァースの定型を破る場合と

ラン・オン・ライネスといふ。

主要作品におけるその割合について説明

・ シェイクスピアのセリふについて

・ シェイクスピアの天才は、作詩法に忠実であつたために生いた構文上の無理と難しさを逆用し、密度、凝縮度の高い文体を創造し得た。

・ 一語一語か一句一句か、独立し粒立つてゐる

・ 話し手の心の形、すなはちその意味だけなく、

それを言つてゐる話し手と言葉との距離・関係と、

その変化・流動を明確に伝へてゐる

・ 節・句か一塊づつ、独立し関連を保つつ

話し手の言ふことの意味内容と、それを言ふ心の動きとの最も効果的に相手役の、そして観客の頭に叩き込まれる様子を書かれており、最後まで行かぬば何を言ひたいのか、解らぬ様子をセリふは一つも無駄に

それを生かすのか、セリふの美しさ、力さの根幹を成すフレイジングなのである。

・フレイジングができてゐない 日本の役者達を批評する。

ハ

・フレイジングができてゐない シェイクスピア劇ばかりなのは、翻訳のせみとばかりは言へない。

セリふか目に見える物体であり、それが力学の法則にしたがつて動くものだといふ事実には氣附かてい

作者の思想、人物の性格、心理だのと、目に目えぬ内面的な「振下格」と称する曖昧模糊たる領域を自己傍聴を続けてきた。

芝居は造形美術であるか、いはゆる造型美術と異なるよつは、造形する過程、工程そのもののリスミを棄てしめることにある。

このことに氣附いた時、新劇ははじめ、そのスタート・ラインに着いたと言へよう。

各劇団によるシェイクスピア上演について批評する。

オン・シアターの舞台でフレイジングができてゐる。

役者がみて感心した。

必ずしも、シェイクスピアは日本人には無理だとは言へぬ。私はそれを絶望しないことにした。

へ讀後感へ

この文章では、シェイクスピア劇のセリふかを持つてゐる性格について第七章で、これでもか、これでもかといった調子で説明してゐたのか、印象的である。天才シェイクスピアが創造的な文体に、福田恒存か、いかん魅力を感じてゐたか、うかかへる。また、その珠玉のセリふかをほかすのか、フレイジングといふ技術であることも、大層強調してゐる。

日本語で、シェイクスピア劇を、自分の納得できる造形美術として、舞台を創造したいといふ。恒存の「夢」を、日頃演劇の世界に縁のない生活をしてゐる私でさへ、いささかなりとも理解し得た。うん、思ふ。

「言葉は行動する」といふ、副題の表現も、これは、シェイクスピアの舞台の上だけの問題ではな。日本の近代化によける諸問題について述べる際、恒存は、常に言葉の用法といふ視点を忘れな。新劇について論じる時も、国語・国語問題を論じる時も、憲法・教員、道徳について論じる時も、恒存は「言葉」が本質的に持つてゐる生命力・美しさ・行動力に、日本人がもっと気附くことか大事だと言つてゐるのだ。

恒存は、あうし、の解題で、この劇のセリふの美しさは、日本語に訳し得る限界を越えてゐると嘆いてゐるが、それはほんとに美しい原文を味わい尽くせる恒存の英語の読解力は、いかばかりか。そのすぐれた能力があるが故に、最も近代化の遅れてゐる「新劇の世界では事をする」といふ、まさに孤軍奮闘であつただらう。

演劇に無縁の私に読んでも興味深いこの文音だか、新劇に關する人々はいかに、こころをみんむか、また、この文音も、一粒の麦、地に落ちてゐるすば、の、一粒の麦なのであらう。